

秦師範、この度、極真カラテ大仏杯にお呼びいただきまして有難うございます。

就職で奈良道場を離れて24年経ちますが、何かお手伝い出来ることがあればと思いいつも出席しています。

それも秦師範と出会い、大学時代極真空手に全うすることで今の自分があると感謝しているからです。

また極真カラテ大仏杯には思い出があります。極真カラテ奈良大仏杯がまだ規模が小さく奈良交流試合と呼ばれていた第1回大会で準優勝をし、その勢いで第四回全日本ウェイト制大会（軽量）4位と私を成長するきっかけとなる大会だからです。

その極真カラテ奈良交流試合は、まだ出場選手も少なく一般部、高校 中学部（当時は高校と中学は一緒）少年部を合わせても50名ぐらいたったと思います。

その後も、高尾正紀（大阪東支部長）と数見肇選手（元世界チャンピオン）が対戦するなど熱戦の多い大会でした。

また大山館長が来賓された年には秦師範から大山館長の日付け人を命じられ貴重な体験をさせてもらいました。

それから1996年に極真カラテ大仏杯と名前が変り約千人近くの出場規模までにもなりました。2, 3年前から参加選手の規則で人数が少し減りましたが、内容はより充実しています。

一方、秦師範は選手育成にも力を入れ、この大会で入賞した選手が全国大会でも活躍するようになり全国で優秀な道場となっています。

さて、今回の第16回極真カラテ大仏杯に参加させてもらいましたが、（今回は写真係でお手伝いさせてもらいました。）

大会を通じて感じたことは出場選手の礼儀や応援のマナーも以前と比べ良くなっていることです。普段の秦師範、支部長等の指導がしっかりしていることがうかがわれます。極真カラテは未来永劫強さだけでなく礼儀もNo1であって欲しいです。

試合では少年部が上手なのには驚かされます。将来世界チャンピオンになりそうな子供達が多くいましたが、色々な事情で一般部まで続ける生徒が少ないとのことで残念です。

しかし空手は『握り方3年』と言われるように奥が深いです。少年部でやめずに更に心技体を鍛え、一撃必殺を身につけ世界チャンピオンになってもらいたいと思います。

この大会でうれしかったことの一つは、奥本支部長の大会の最後の挨拶が立派なことでした。彼は奈良道場で一緒に練習した、今在籍する一番古い後輩です。入門当時はひ弱な高校生でしたが、彼の好きな座右の名『継続は力なり』を実践し努力してきた証だと思います。

また、大会にはいつもお世話になっている、支部長 三浦敏司、伊藤賢二、中西庄司、奥本仰一、武田健司、小西誠次、直轄指導員 西照之 各位にお礼を申し上げます。

彼らは、無口ではありますが頼りがいのある男達です。

奈良支部が大変な時も、何事にも動じずおのれの信念を貫き奈良支部を守ってきた極真魂を持った男達です。

私は、極真空手を離れましたが『頭は低く、目は高く、口慎んで心広く、考を原点として他を益す。』の極真空手の精神に恥じない人間として生きていきます。

秦師範今後とも宜しく御願いたします。

押忍

奈良道場OB

木村隆史